

ふとこる 山懐に抱かれて「みんなで5人」

標高1002米。五木村端海野分校の子供たち



国武正美ちゃん (小6)

伊牟田清先生 (51歳)

丸山涼子ちゃん (中1)

河野真二先生 (48歳)

国武端代ちゃん (中3)

丸山輝美ちゃん (小3)

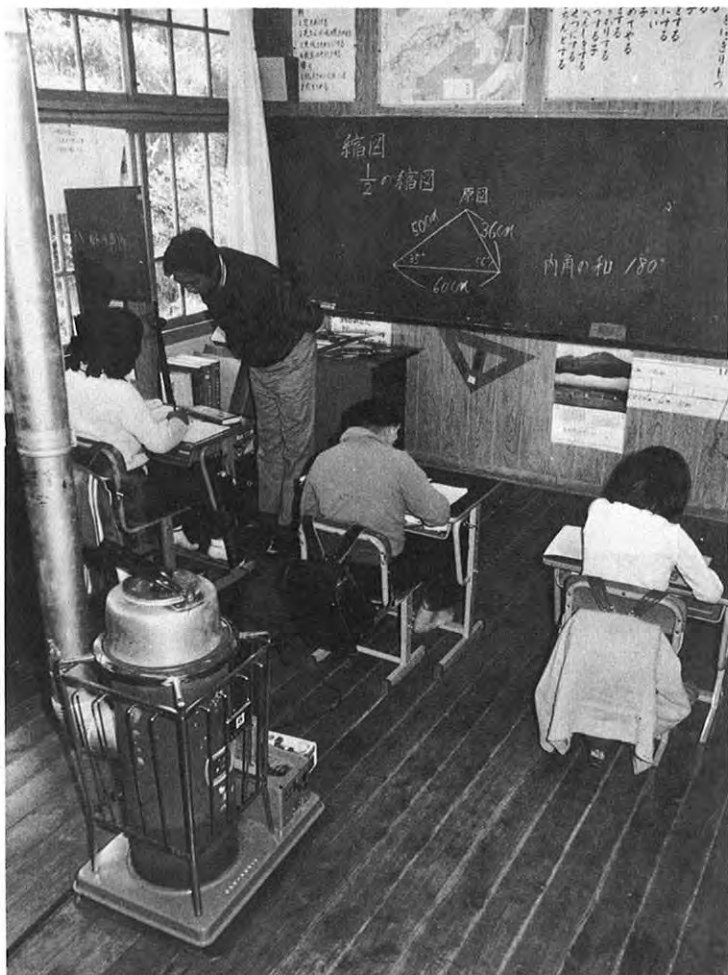
丸山政男くん (小6)

伊牟田・河野両先生ともに分校での勤務年数3~4年、村外からの赴任である。「仲間が少なく、当地での対人間関係も限られているこの子らに、いかに社会性を積極性を身につけさせるか、このことが私たちに与えられた課題です」と話す。



▶今日も山あいに元気な子らの歓声がこだまする。五人はなにをするにも一緒。端代ちゃんがりーダ格となり、政男くんがやんちゃぶりを発揮する。政男くんは山歩きとヤマメ釣りの大好きな少年だ。

球磨郡五木村頭地から北北西に三十五キロ、落葉樹の雑木林を車で縫うこと約一時間四十分。めざす端海野分校は標高千〇〇、寒風吹きすさぶ山あいにあった。五木一中・五木西小両校の分校である端海野分校は児童生徒数五人（小学生三人、中学生二人）教師三人の典型的なへき地校である。子供たちのいる端海野の集落は、山林労務といちご苗栽培で生計を立てる八戸の世帯で構成され、内二世帯から子供が通学している。端海野の自然は厳しい。冬場、気温は氷点下十五度にもなり、積雪は時に五十センチを超える。この間一切の生産活動はストップ、人々は根雪の溶ける三月まで、じっと息をひそめて春を待つという。今後、時代の変せんの中でこの八戸の集落がどうなっていくかわからない。しかし、ここには学校がある。山懐に抱かれてすすく育つ五人の子供たちがいる。へき地教育に情熱を燃やす教師がいる。端海野に子供がいる限り、分校がある限り、ここにはやはり明日がある……。



▲児童3人に教師1人の小学生教室。3年と6年の複式学級が行われている。端海野八戸の世帯には53年度入学該当児1人がいるのみ。